

2021年9月19日 礼拝説教要旨

詩編講解説教78「過去の重さ」

詩編78：1～8、ローマ6：20～23

詩編第78編は、全体的にイスラエルの歴史を辿るような内容になっています。そこには教育的な意図、目的があったと言われます。子どもたちにイスラエルの歴史を伝え、憶えてもらう。詩編は歌ですから、歌うようにして歴史を学ぶ、身につけるのです。でも単に歴史を憶えるだけではありません。肝心なことは、その歴史を通して、神さまがどのようにイスラエルに関わられたのかを知るのです。4節に「主への賛美、主の御力を、主が成し遂げられた驚くべき御業を」とあります。歴史に介入される神さまの御業を知って、最終的には神さまを讃えることが歴史を学ぶ目的になります。

「わたしは口を開いて箴言を、いにしえからの言い伝えを告げよう」（2節）新共同訳聖書では「いにしえからの言い伝え」と訳しておりますが、ここで「言い伝え」と訳された言葉は「謎」とか「神秘」と訳することができる言葉です。この謎、神秘にこそ、わたしたちの歴史が神さまの御業として受け止められる最大のことがあります。ではその謎とは何でしょうか。「先祖のように反抗の世代とならないように。心が確かに定まらない世代、神に不忠実な霊の世代とならないように」（8節）ここで三つのことが言われます。まず先祖が頑なな反抗の世代だったこと。それは神さまを信頼せず、反抗的、敵対的であったことです。次に心が確かに定まらない世代だったこと。心が定まらないというのは心が神さまに向かってまっすぐではないという意味です。しばしば聖書では「右にも左にもそれてはならない」と教えられます。それは他の異教の神々に心が揺れることです。そして三番目は神に不忠実な霊の世代だったこと。これは神さまとの約束を破る、契約違反のことです。アダムから始まって以来、人類はこの罪を重ねてきました。それが詩編78編には伝えられています。「彼らは重ねて罪を犯し、砂漠でいと高き方に反抗した。心のうちに神を試み、欲望のままに食べ物を得ようとし、神に対してつぶやいて言った。『荒れ野で食卓を整えることが神にできるだろうか・・・』」（17～19節）ここだけを読んでもいかにイスラエルが神さまに反抗的だったかわかります。自分たちをエジプトから救い出してくださったお方です。感謝しても感謝しきれない、その神さまに対して反抗し、その恩を忘れて、他の神々に心を向け、約束を破り、神さまを裏切る。イスラエルの歴史は、そのような本当なら教えたくない、隠したくなる歴史、負の歴史の連続なのです。

でも聖書はこの負の歴史をそのままに伝えるのです。こんな話を伝えたら躓きになる。だから伏せておこう。そうは考えません。世の知恵というのは、良いことは公にして、悪いことはできるだけ隠す方向に向かいます。あったこともなかったことにしたり、美談にしまったり。そうやって歴史が歪められていきます。わたしたちの国もそういう危うさの中にあります。過去の歴史、例えば戦争の歴史を真正面から向き合おうとしないことがあります。アジアの国々を侵略した歴史を教科書で扱わず隠して子どもたちに教えようとする。隠蔽する。だから同じ過ちを繰り返すようになるのです。かつてドイツの大統領ヴァイツェッカーが終戦40年を記念した講演『荒れ野の40年』という講演の中で「過去に目を閉ざす者は現在にも盲目になる」という有名な言葉を残しました。そのように歴史を簡単に曲げたり、過去を軽くあしらうようなことをするならば、それは今を生きることも、将来に対しても軽くあしらうような生き方になってしまう。そういうわたしたちに将来はないと言わなければなりません。

イスラエルは、このような負の歴史をそのまま隠さず後の世代に伝えました。どうしてでしょう。それは、この頑なで、不忠実な民を、それでも神さまは見捨てずに、救われる、その恵みを明らかにするために他なりません。「しかし、神は憐れみ深く、罪を贖われる。彼らを滅ぼすことなく、繰り返し怒りを静め、憤りを尽くされることはなかった」(38節)ここに最大の謎、神秘があります。このような反抗の民をそれでも神さまは見捨てず、繰り返し怒りを鎮め、憐れんでくださる。それはまさに謎、神秘としか言いようがありません。でもそこに神さまの愛が現れているのです。わたしたちの負の歴史を覚えるときに、わたしたちはそこに神さまの愛、恵み、憐れみが豊かに注がれていることを悟るのです。この歴史は自分たちが作り上げたのではない。神さま恵みの上に成り立っているのだということを知るのである。

そしてこの愛と憐れみが頂点に達したのがイエス・キリストの救いです。「神は憐れみ深く、罪を贖われる」(38節) その通り、イエス・キリストがこの過ちだらけのわたしたちの歴史を担われ、この過去を担われ、十字架におかかりになられた。そのようにしてどこまでもこの頑なな民を憐れんでくださり、救いの約束を忠実に果たしてくださるのです。わたしたちはここにこの歴史の重さ、過去の重さを知ることができます。それはキリストの命が注がれた歴史なのです。教会の歴史も個々の歴史も、それは神さまがその憐れみを尽くしてくださった歴史、過去の重さなのです。だから重いのです。

いみじくも今日は、教会の独立を覚えて礼拝をまもっております。わたしたちの教会の歴史を思うときに、やはり教会も過ちを犯してきました。何度も触れることですが、かつて日本基督教団の最高責任者は伊勢神宮に参拝したのです。神ではないものにそれてしまった。そういう過去を背負っています。ルターの言うように「赦された罪びと」なのです。でもそのわたしたちを神さまは憐れみ、今日まで教会を守り導いてくださった。これは恵みとしか言いようがありません。そしてこのように恵みを受けたものは、決してこれに甘んじることなく、その過去の重さを受け止めて、謙虚に歩むものと変えられていきます。